

乳ガンなんかに 負けられない

千葉敦子



文藝春秋

乳ガンなんかに 負けられない

千葉敦子

文藝春秋

著者略歴

1964年学習院大学政経学部卒。東京新聞入社。
経済部記者となる。1967年ニーマン・フェロ
ーシップを得て、米国ハーバード大学大学院
に留学。1968年末東京新聞退社。その後、P
R、調査にたずさわり、1975年フリーランサ
ーとしてジャーナリズムに復帰。現在に至る。
訳書『敵視の狭間で』（TBSブリタニカ、
1976年）

連絡先 日本外国特派員協会 〒100東京都千
代田区有楽町1-7-1 有楽町電気ビル
と連絡は書面でお願いします。

乳ガンなんかに敗けられない

昭和五十六年六月二十日 第一刷
昭和六十二年九月十日 第六刷

定価 一、二〇〇円

著者 千葉敦子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 東京 二六五局一二二一番

郵便番号 一〇二

印刷 大日本印刷
製本 加藤製本

※万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

©Atsuko Chiba 1981

Printed in Japan

ISBN 4-16-336701-2

〈目次〉

1	クリスマスの贈りもの	7
2	週末旅行	13
3	フリーランス・ジャーナリスト	19
4	年末年始	28
5	診断と入院手続き	35
6	友情の大波	42
7	セミ・ヌードの撮影	50

8	入院	57
9	病院での暮らし	65
10	見舞客・見舞品・見舞状	73
11	自宅での週末	81
12	手術の準備	90
13	手術日	98
14	手術後第一日	103
15	回復へ	109
16	医師と患者の関係	116

25	乳ガン——米国の場合	182
24	知る権利	175
23	全快祝いパーティー	168
22	人工乳房	161
21	通院による加療	154
20	ダンス	148
19	社会復帰への過程	140
18	自宅での療養生活	132
17	退院	125

26	私の健康管理	189
27	私の職業生活	198
28	私に影響を与えた人々	208
29	終章	214
	あとがき	221

カバー・口絵写真

装幀

石井幸之助
石井雄司
坂田政則

乳ガンなんかには敗けられない

高橋勇医師、五関謹秀医師と
世界各地に住むすべての友人に
深い感謝をこめて

1 クリスマスの贈りもの

発見は全くの偶然だった。

一九八〇年十二月二十四日の朝、目ざまし時計のベルをとめるために身体を右へひねり、とめたあと身体を元へ戻して、もう少しベッドに横たわっていようと怠け心を起こした。裸で寝ていたので、全くなんなら特別の意図もなく右の手が左の胸の上部に触れたとき、なんだか固いものが指先に感じられたのだ。とたんに眼がパッチリと醒めた。

まず寝室をじっくりと見渡し、北側と東側の窓にはまっている障子、ベッドの左側に置いてある座卓とその上にあるニューヨーク・タイムズのサンデイ・マガジン、左のベッド脇においてある何本かの洋酒の瓶を見て、視線を右へ移し、出入口にかけてある赤いバスローブや右のベッド脇に並んでいるたぐさんの読みかけの本を眺め、夢を見ているのではないことを確かめた。それから、その固いものにもう一度さわってみた。

そのときの感じでは、直径一・五センチくらいの非常に固い丸いしこりが、さわると皮膚の下で微かに揺れるように動いた。しこりは左の乳房の上部、胸の中心に近い側で、乳首からは大分離れた位置にあった。

右の手で左の乳房と腋の下のリンパ腺を調べ、次に左の手で右を同じように調べる。別にはかには異常はなさそうだ。予備知識から判断して、まず乳ガンに間違いないと確信した。

とうとうきたか。それにしても少し早過ぎるのではないか……。

父は膀胱ガンのため五十六歳で死亡、六十五歳の母は十五年間胃ガンとの闘病生活を続けている。親戚にもガンによる死亡者は多く、もしそういうものがあるならば、ガンにかかりやすい体質を受け継いでいる可能性は高いとふだんから思っていた。

だから三十歳を過ぎてからは、かなり神経質に全身の検査を受けていた。乳房についても生理日と生理日との間に、家庭医学書に書いてあるとおりの自己診断法でチェックしているつもりだった。

しかし敵は思いがけないところに潜んでいたのだ。つまり乳首からかなり離れたところに現われたため、あるていどの大きさになるまでは気がつきようもなかったというわけだ。実際、乳房のカップのギリギリの端にあり、のちにX線写真を撮る時も、患部を写すのに苦労したほどである。立ち上がって鏡に写して観察しても、見た目には何も異常はない。

やっぱりきたか、という感じの方が迫ってきて、案外強い衝撃は受けなかった。むしろ外部器官から始まってよかった、これからはもつと念入りにチェックするから、もし将来内臓にガンが見つかったも、初期の段階で手が打てるだろう……などと考えた。

乳房喪失の悲しみなどは全く感じているヒマがなかった。それよりも、いかにして被害を片方の乳房だけにとどめるか、が最大の関心事だった。

むしろ、他の器官へ転移している可能性もあった。どこと云って具合の悪いところはひとつもないが、そこがガンのくせものたるゆえんと聞いている。相当ひどくなるまでは自覚症状がなく、そういう症状が出たときには手遅れになっているケースが多いというではないか。

第一、乳房のしこりにしても、全く痛くもかゆくもない。全身どこも異常はなく、体重も減っていない。

乳房だけなら切り取ってしまえばすむ。しかし、ほかに転移していた場合は、手術だけではすむものだろうか。これから長い闘病生活が始まるのだろうか。

今から思い悩んでも始まらないので、とにかくどういふ結果が出て最善を尽くして病氣と闘おうと決意を固める。ガンがどんどん全身に進行していくとしても、脳に転移して私の思考力を奪うまでは、ジャーナリストとして書き続けよう、と考えた。これは突然思いついたことではなくて、日頃から病氣について私が抱えている基本的な考え方である。

その点ジャーナリストというのは便利な職業で、どこでも仕事ができる。タイプを打った字を書いたりできなくなったら、テープレコーダーに吹き込めばいい。精神が生きている限り表現したいという意欲も生き続けるだろう。

私がこういう考え方を持つに至るまでには、母の影響をかなり受けている。父が亡くなったのは、私が大学生のときで、その衝撃からようやく立ち直りかけたころ母の胃ガンが発見された。私は新聞記者になりたての忙しい時期で、今度は母の死を迎えるのかと暗い気持ちだった。

しかし、母は自分の病気がガンであることを知っても、自分に残された人生を充実させようという努力を怠らなかつた。これまで十五年間、胃ガンの治療法としては蓮見ワクチンを採用、その他漢方薬や各種健康法で自分に合うものを見つけては取り入れている。

が、もっと重要なのは、母が次から次と自分のためのプロジェクトを計画し、ひとつずつ完成しているというその態度である。病気になってからこれまで、友人と家族から原稿を集めて夫の追悼集を編集・出版し、夫の学生時代の友人を集めて、彼が青春の情熱を注いだ昭和初期の共産主義運動を回顧する座談会を開き、それをもとに原稿を集めて当時の運動の記録を編集・出版した。また第二次大戦中から敗戦後にかけて、次々に生まれた四人の娘たちの幼児期を描いた本も出版した。現在は、自分の生いたちを振り返っての随筆を書きためているらしい。母は結婚前に神近市子氏と共に「婦人文芸」の編集に当たっていたほか、若干の編集経験があ

る。

ガン患者でありながら、こうしたまとまった仕事をしているし、あちこちに頼まれて有料無料の原稿書きをしているらしい。講演会や展覧会にもときどき出かけて行く。国際政治や社会問題への関心も一向に衰えない。

母はひとり住まいで、自分の身の廻りの一切を自分でしている。季節ものの入れ替えや力仕事は娘たちが訪れたときにするが、日常の買いもの、掃除、洗濯、料理は自分でする。

娘たちが始終電話を入れて異常がないかどうかを確認しているが、通院をはじめとする健康管理も母自身がしている。

こういう母を見ているから、私は乳ガンらしいものを発見しても、動転したりはしなかった。ガンであることが確認されても、すぐに死ぬことはないはずだ。敵をなだめすかしてやっていけば母のように長く生きられるかも知れない。とにかく力尽きるまで、なけなしの才能に磨きをかけ、作品を残していこうと心に決めた。

その日のうちに、どこの病院のどの医師に診てもらうべきかについての調査を始めた。まずはまたまた来日中だった外科医の米国人の知人に触診してもらい、乳ガンである可能性が非常に高いとの意見を聞き、米国で手術をした場合の得失について話し合った。というのは、乳ガンの発生率は米国の方が日本より数倍高く（正確な統計はないが日本では年間一万数千件、米国では九

万件といわれる。米国の人口は日本の約二倍、そのため技術水準が高いであろうと想像したからである。次に日本人の医師の友人、医事関係のジャーナリストなどの意見を聞いた。

しかし、一日中その方面の調査ばかりをやっていたのではない。日本電氣に出かけて行って、工場のコンピュータ化に伴う人員転換の話を聞くなど、通常の取材活動や原稿書きもふつうにした。これは入院直前までできる限り続けた。

クリスマス・イヴの夜になって、都立清瀬小児病院に勤めている妹の史子に電話をし、ほかの人の意見をいわずに彼女の考えを聞いた。私の病歴、体質、性格、職業、生活態度を一番よく知っている彼女の意見は「最初から信頼できる病院と医師を選び、いったん決めたら変えないこと」という忠告のもとに、都立駒込病院がよいだろうというものだった。

駒込病院は、ガンと感染症の専門病院で、ほかの病院からの紹介が必要である。翌二十五日、若干の追加調査をしているうちに、幸いにも駒込病院の高橋勇外科部長を紹介して下さる人があって、早速一月八日の予約をとってもらった。

最終的に日本の病院を選んだのは、手術後、かなり長期間にわたって通院し治療が続ける必要があること、また乳ガンは転移しやすいので、もし転移していた場合やその恐れが非常に強い場合には、やはり自分の住んでいる場所に近い総合ガン病院が望ましいこと、などの理由による。また、私はアメリカの保険には入っていないので、費用の問題もあった。

2 週末旅行

そこまで手続きを済ませてしまうと、一月八日の診察日まで片づけなければならないこと
のリストづくりにかかった。

まず初めはバリ行きの飛行機の予約取り消し。十年来、クリスマス前に日本を発ち、欧州か
米国で冬休みを過ごして一月十五日の「成人の日」に帰国するのを習慣としている。この冬は
仕事が多忙で、クリスマス前に出発できず、年末に発つ予定にしていた。

休暇旅行と仕事の海外出張をキャンセルし、大型の仕事を断った以外は、ふだんの通りに
仕事をし、ふつうの生活することにした。パーティーの招待も受け、ディスコに踊りにも行
った。

そしてその週末、年末最後の週末には、男友達と八丈島に出かけることになっていた。金曜
日の午後、簡単な旅仕度を整えてから、編みかけのマフラーを仕上げ、房をつけて、彼のため

の「一日遅れのクリスマス・ギフト」にし、銀色の包装紙に包んでリボンをかけた。そんなことをしながら、どういうふうにもこの話を切り出すべきか、あれこれ考えたが、あまりいい知恵は浮かんでこない。

しかし、この旅行中にどうしても話をしなければならなかった。彼は翌週東南アジアに旅行に出ることになっており、診察日の前日には東京へ戻るが、その後ふた晩のちにはニューヨークへ帰る予定である。ニューヨークに住む彼と、東京に住む私は、年に数回、数週間ずつをどうし合って、世界中のどこかで共に過ごすという関係を持っている。

夕方、バラの花束を手に私の家に来た彼は、マフラーをとめても気に入ってくれた。実際、白人の皮膚の色には、くすんだピンクとオフ・ホワイトを主体にした縞模様がよく似合った。

六本木の「世良田」で焼鳥の夕食をとり、私たちはタクシーで竹芝桟橋に向かった。東海汽船のストレチア号で夜の海に出た時には、ふたりとも、かなりロマンティックな気分になっていた。私たちは、ふだんは完璧なリアリストだが、ロマンティストの要素も多分に持ち合わせている。デッキに出て、遠ざかっていく東京のあたりを見つめながら、私の家から持ってきたフランス製のワインを代わるがわる飲み、いろいろな話をし、そしてひっきりなしにキスを交わした。

話を持ち出すのは、なるべく旅の後半にしたかった。彼がどういう反応を示すか想像がつか